

環東シナ海をめぐる古代文化研究上 濟州島の諸遺蹟探索の問題点と展望

江坂輝彌*

南北1000km、東西800kmの東支那海は台湾の對岸、中國の福建省泉州市付近の海岸から小舟に便乗、東北ないし東北東に1400km乃至1500km向って航行すると九州地方西部か韓國西南部に到達する。本濟州島もこの行程のほぼ中央に位置する。今日この泉州付近から10屯たらずの漁船に數十人が乗り、一週間前後の日程をかけて、韓國南部、日本へ密航して來る人が多いことは新聞報道などで知っている方もあると思います。

このコースは風と潮流をうまく利用すれば比較的容易に渡海できるのである。中國の廣東省、福建省の海岸地方には漁業を専業とする蛋民(タンミン)が居住し、小舟に居住している人も多い海洋民である。この人人が古代から南シナ海、東シナ海の海を我が物顔に航行していたのである。この航海の始りは縄文海進が開始された完新世初頭、約8000年前にまで遡ると考えられる。また更新世最後のヴェルム氷期の時代には東シナ海の大陸棚地域と黃海は陸化し、韓半島と濟州島、西北九州の一部などが陸続きのところもあったと思われる。その後、後氷期の時代に入り、地球上が温暖化するとともに氷河地域は極地と高山地帯へと後退し、大陸の山地に源を發する河川の水量も増大し、太平洋・大西洋などの海水面も次第に上昇、ヴェルム氷期の頂点には海水面が150mぐらい低下していたものが、縄文海進の頂点、今から約6000年前には現沖積平野の標高2m前後のところまで海面に没し、平野地域が広い干潟となり、干潟地を好んで棲息した漁貝類が豊産する時代を迎えるのである。

近年、福建省南部の漳州市付近でま多数の後期舊石器時代の遺蹟が発見され、この頃、台湾海峡の水深20m内外の淺海は陸化し、台南市方面とは陸続きで、漳州市付

* 慶應義塾大學 名誉教授・松阪大學 教授

近原産の岩石で製作した小型な剥片石器が台南市付近の後期舊石器時代の遺蹟からも発見され話題を呼んでいる。

また近年稲の栽培は中國長江流域の湖南、湖北省方面では今から約9000年前にジャポニカが野生稻から栽培へと踏み出したような形跡があり、長江下流域から浙江省杭州灣一帶では今から約6000年前に水田耕作が開始され、水牛の肩胛骨に若干の加工をした鍬が作られ、これで耕作がおこなわれていたようである。

この時代の代表的な遺蹟は浙江省寧波市近傍の余姚市に所在の河姆渡遺蹟があり遺蹟のわきに今秋この出土品を中心とした河姆渡博物館の開館が予定されている。

河姆渡遺蹟では球状耳飾、首飾りの玉などの装身具類、稲以外に豆類などの栽培植物も夥しい量発掘されている。

今から8000年から6000年前以降に、浙江省杭州灣岸付近一帶から東シナ海を横断して韓半島西南部、濟州島、西九州地方に渡來した文物は極めて多いと思われる。

私は今日、考古學的な視點に立つて、この地域の文物交流と遺蹟・遺物の實例を示し、お話しを進めてゆきたいと思う次第です。

【本 論】

1. 浙江犬、珍島犬、柴犬のルーツ

今日、濟州島にも棲息し、全羅南道西南部の珍島で天然記念物に指定されている珍島犬の存在は皆さんも御承知のことと思います。この珍島犬は兩耳が立ち、尾は上に巻く、短栗毛の中型犬で、日本列島で生育する中型の日本犬、柴犬と近似の體型をした犬です。

體型と毛色の近似の犬は中國の浙江省南部の山地から福建省北部山地に棲息し、浙江犬と呼ばれている。また浙江犬近似の中型犬は台灣、東南アジアのベトナムの地にも今日飼育されている。

これらの犬は浙江省山地で舊石器時代に野生の犬が家畜化され、先ず、鹿、猪など狩獵の時山林から草地へ追い出す勢子的役割りを訓練されたものと思われる。河姆渡遺蹟でも家畜化されたこの中型犬の下顎骨がかなり發掘されておるが頭蓋骨は完全であり埋葬された犬もあった可能性が考えられる。また狩獵の対象となった鹿、

猪の骨格もかなりの量發掘されている。

台北市士林區芝山巖貝塚は出土の貝殻、木炭によるカーボン14の年代測定で今から3800年前のものとなっているがこの貝塚からも中型犬の頭蓋骨、下顎骨、四肢骨などが多量に發見され、鹿、猪類の骨も多く、この時代に狩獵犬として浙江犬を連れてきて飼育し、死亡したものは埋葬していたものではないかと推察される。

恐らくこの浙江犬が韓半島の西南部と日本列島には縄文文化早期中葉の今から約8000年前に渡來していたものと思われる。

日本では四國の愛媛縣上浮穴郡美川村上黒岩岩陰遺蹟(Rock-shelter)第4文化層、長野縣南佐久郡北相木村柝窟岩陰遺蹟から押型土器に伴って2頭と1頭の中型の埋葬された完全骨格が發掘された。従って日本の縄文文化早期中葉には柴犬と同型の犬が狩獵犬として飼育されていたことは疑なく、浙江犬の日本列島への渡來年代はこれより更に遡ることは疑ないところである。また日本にある浙江省方面で発生したと思われる玦状耳飾も、ほぼこの時代にまで遡り浙江犬とともに渡來した裝身具であると思われる。

浙江犬と同型の中型犬が、韓半島西南部に渡來したのもほぼ日本列島と同時期と考えられるが、韓半島南部のこの時代に該當する遺蹟はまだ未發見のようであり、今日知られるものはこれより數千年遅れた今から5000年前の櫛文土器文化の時代の貝塚發見の中型犬が今日知られる最古のものであろうか。(慶尙南道統營郡山陽面烟台島貝塚など) 櫛文土器文化の時代の貝塚からは埋葬したと思われる犬骨の發見は知られていないが、一世紀初葉頃の無文土器出土の初期鐵器時代の貝塚、全羅南道西南部の海南郡松旨面郡谷里貝塚で木浦大學の發掘トレンチからこの中型犬の埋葬骨格と思われる犬骨が發掘されている。また隣接する國立光州博物館の發掘トレンチからはこれと異った大型犬の埋葬骨格が出土しているようであるが、未發表の資料であり詳細は同博物館の發掘にまちたい。なお大型犬の下顎骨は金海市廳の建築で破壊された、慶尙南道金海市府院洞貝塚からも發掘され東亞大學校の博物館に保存されている。これも郡谷里貝塚とほぼ同時代のものである。

日本列島においても東北地方の宮城縣、阿武隈川流域柴田郡柴田町上川名にある縄文文化前期初頭、今から約6000年前の貝塚から中型犬の柴犬の祖先とは異なる大型犬の頭蓋骨、四肢骨の一部などが1947年頃地元の小學生により發見されたが、これも骨が一頭のものと考えられ、貝塚の貝層中に埋葬されていた大型犬の骨格の一部

ではなかったかと推察される。

日本では大型犬の骨格、歯牙などの一部は横浜市杉田貝塚(縄文時代後期)など数遺蹟から発見されており、これらの大型犬は中型犬と異り、東北アジア方面から渡來した別系統の犬ではないかと考えられている。恐らく日本には縄文文化早期、今から8000年以上前に東北アジアの沿海地方から北海道西南部方面へ渡來したのではないと思われる。

韓半島における大型犬は未だ発見例も僅少で縄文土器文化の時代に大型犬が家畜として飼育されていたかどうか全く不明であるが、東北アジア方面から初期の縄文土器文化が韓半島を南下した時代、完新世初頭に東北アジアから渡來してきたものではないだろうか。

麻布獣醫科大學の田名部雄一教授は血清學の立場からすると浙江犬と日本の柴犬の間に大きな差異があり、この中間的様相を持つものが珍島犬であり、浙江犬に違った様相の混血變化を考えられている。私はこれは韓半島における北方大型犬との混血と日本列島に渡ってのち北海道から東北日本へ渡來した北方大型犬の混血によるものではないかと思うのであるが、この見解が正しいものかどうか、専門の田名部教授の意見をまだ伺っていない。

珍島犬と同型の犬は今日まで濟州島にも飼育されており、郭支貝塚や沙溪里貝塚などの無文土器の時代から翰林邑のハンドル洞窟、朝天邑北村里遺蹟(貝塚)など縄文土器文化後期の時代まで、狩獵用の犬として飼育されていた痕跡はたどることができる。(李清圭教授 發掘資料)

しかし濟州島では今日これを遡る縄文土器文化の遺蹟は発見されていない。恐らく縄文土器文化前半以前の遺蹟は完新世初頭の濟州島の火山活動期の熔岩台地の熔岩下など、火山噴出物の下に埋没しているものと思われる。従って今後島内の新設道路の切通し崖面下など、火山堆積物の下層が見られるような場所を注意深く觀察を續けると、縄文土器文化前半以前の遺蹟の発見の可能性は強いと思われる。

2. 玦状耳飾の擴り

かって玦状耳飾は東南アジアに起源があり、縄文文化前期の頃、日本へ到達したものととの假説が稱えられた。しかし近年中國長江南部地域の考古學調査の進展とともに上海市崧澤遺蹟や南京市北陰陽營遺蹟などから今から5000年前を遡る玦状耳飾

が多数発掘され、1973年夏には浙江省余姚縣河姆渡遺蹟が発掘され、7000～6000年前の文化層から数多くの玦状耳飾が出土した。

河姆渡遺蹟出土の玦状耳飾は形體は環状をなし肉厚なもので、日本の縄文文化早期末から前期の前葉までの遺蹟出土のものと近似の形體をしている。恐らく日本列島の西九州地方に東シナ海を横断して最初に渡來したものは中國の江南地方でも新石器時代初葉の河姆渡遺蹟の人人などが佩用した古型式の玦状耳飾であり、この形體のものもわが日本列島では東北地方南部の宮城縣下にまで到達している。(宮城縣柴田町 上川名 貝塚出土例など)

そして環状の玦状耳飾に肉薄扁平になり、下半が若干長く伸びた形體のものは中國でも崧澤、北陰陽營など今から約5000年前頃の遺蹟からの出土例が多く、日本でも縄文時代前期後半になるとこのような形體のものに変化している。

中國では長江以北にも若干の出土例が知られているが極めて少い。

東シナ海を浙江犬と同一ルートで渡海傳播したものとすれば、玦状耳飾は韓半島の西南部、濟州島などにも發見例があるはずである。

日本でも九州西南部の地域ではほとんど發見例が知られていなかったが、近年鹿児島縣薩摩半島西南端の枕崎市西南西100kmの東シナ海上に浮ぶ小島、草垣諸島の北端にある燈台のある島にヘリ・ボートを建設中、島の平坦面から縄文文化前期初頭の石坂式土器片とともに1点ではあるが玦状耳飾の破片が發見された。

私は近い將來韓國南部でもかならず玦状耳飾の發見があるだろうと秘かに期待していたのであった。この期待に違わず國立中央博物館の李建茂氏が慶尙北道清道郡の沙村里遺蹟で表採してきた無文土器片に混じて、乳白色の滑石質の岩石で製作された玦状耳飾破片かと思われる遺物の存在に氣付かれ、筆者にその鑑定を求められたが、これは紛うかたない玦状耳飾であった。私は初期鐵器時代かその直前の無文土器の時代のものではないと考え、表採の全破片を一つ一つ手にとって詳細に觀察したところ、大きさ1cm余の小破片であったが、爪形の刺突文の施文された櫛文土器の小破片を發見した。私は恐らくこの櫛文土器片は伴存した韓國新石器時代前葉のものであると考えた。この一片の發見であるが、韓國にも浙江犬とともに、7000～8000年前に玦状耳飾も渡來していた可能性が濃厚になってきたとみるべきであろうか。

玦状耳飾は濟州島の古代遺蹟からも發見の可能性はあるように思われる。

3. 荏胡麻(罌州), 漆, 梘, 瓢箪(바가지), 綠豆など有用渡來植物について.

韓國でドウルケと呼ばれ葉はカルピや刺身を包んで食したり, 醬油等とともに食用にされ, 種子は菓子にしたり, すりつぶして粥にしたり, 熱湯ですりつぶした粉末を溶解し砂糖, 蜂蜜などを加えたドウルケチャとして食するなど, 用途は廣範で, また種子から油をしぼり, 食用, 燈火用, 工業用などにも供されている.

この傳播も韓半島南部では完新世初頭, 櫛文土器文化初頭, 今から約8000年前頃まで遡るものと考えられるが, 韓國内の諸遺蹟では荏胡麻の種子の発見は全く未確認であり, 今後の調査に期待がかけられる.

荏胡麻は印度東北部, ミヤンマ北部山地から雲南, 廣西, 貴州の山地, 湖南, 廣東, 江西, 福建, 浙江省など中國南部山地に廣く自生する紫蘇科の植物で, この地方に自生する漆の樹液を木製品などに塗布する際に, 漆が塗布面によくのびる緩和剤として荏胡麻の油が使用されている. 中國では今から約7000年前に木製の鉢, 皿, 籠などに漆を塗ったものが河姆渡遺蹟などで發掘され, 日本でも福井縣三方郡三方町鳥浜貝塚などの縄文時代前期初頭今から約6000年前の遺蹟から朱漆塗の櫛, 木製淺鉢などが發掘されており, 浙江犬とともに浙江省方面から東シナ海を渡って日本列島の西九州方面と, 韓半島西南部に漆と荏胡麻の種子が渡來し, 樹脂塗料を塗る技術も傳播していたのではないかと思われる.

また韓國で水をくみ, 酒を飲む杓子として愛用されているパカチ(※箪)の傳來の歴史もかなり古く遡ることと思われるが, 韓國ではこれも亦古代遺蹟からの発見例は殆ど知られていない.

瓢箪は原産地が西南アフリカのニジェール川流域地方であるが, 東北アフリカ, アラビア, インドを経て, 東南アジア地方にまで傳播したのは完新世初頭約8000年前といわれ, 今から約7000年前の浙江省の河姆渡遺蹟でも瓢箪の果皮と種子が出土している.

また日本列島でも西九州地方の熊本縣宇土市曾畑貝塚近傍の低濕地遺蹟で縄文時代前期初頭, 竊A式の時期の貯蔵穴内から, 今から約6000年前の瓢箪のほぼ完形の果皮が発見されている. このほか福井縣鳥浜貝塚など數遺蹟からの出土例が報告されている.

また韓國の農村で近年まで使用されているパカチと形態も全く同型の瓢箪を縦割

にした杓子が日本列島の南端沖縄縣の宮古島、石垣島方面でペーラの名稱で使用されていることも興味深いことである。

綠豆もビルマ北部の原産で、今日韓國で使用されている豆もやしの原料となる豆、ピンデットクにする豆は綠豆である。無文土器文化の遺蹟から出土が報告されている豆とされているものを詳細に調べると綠豆と判別できるものがあるかと思われるが、今日未だ判別されたものはない。これより遡る櫛文土器文化の時代のものについてはまだ全く知られていない。

中國では河姆渡遺蹟などから出土例が知られ、日本福井縣鳥浜貝塚、鳥取縣桂見遺蹟などから出土例が報告されている。

梶も東南アジア地方を原産地とする植物で、日本では山桑とも呼び、葉を桑とともに養蠶の飼料に使用されているが、春から夏に伸びる若芽の皮を剥ぎ、水に漂らし、この植物繊維を一かたまりにして棒状のもので叩いて延し、ペーパー状の繊維布を製作する。これは今日でもポリネシアのフィジー島などで、「タバ」の名稱で衣類として使われている。この繊維衣類は中國にも傳播し、梶の種子は河姆渡遺蹟でも発見され、この衣類は古書には「タバ」の名稱で記されている。

日本では白タへ、ニギタへなどタへの名稱が萬葉集に見られるが、これは中國のタバから轉化した名稱で、本來は梶の繊維衣類を指す名稱であったが、8世紀頃以降絹織物が一般化するとともに絹織物を指す名稱に變化したものであろうか。

梶の種子は最初縄文文化晩期、青森縣八幡崎遺蹟で発見され、約3000年前に梶が本州北端の青森縣下にまで擴がって植樹されていたことが明らかになった。

梶は福井縣鳥浜貝塚からも種子が発見されており、縄文時代前期初頭には前記した文物とともに日本列島に廣く浸透していたことが明確であり、以上に述べた文物が完新世初頭、東シナ海を渡って、日本列島の西九州地方に傳播するとともに韓半島西南部へも傳播していたことはほぼ間違いなく、今後この地域の低濕地遺蹟の発見調査に期待されるところが大である。

またこの傳播経路から考えるとこれらの文物が當然濟州島にも渡來したことは疑なく、今後の遺蹟発見、探索によって思わぬところから発見のチャンスがあるように思うのである。

また濟州島を含めた韓半島南部に現在タロ芋の中間の里芋が栽培食用にされているが、今日はほとんど食用に供されぬ、あくの強い、水漂しで澱粉はとることがで

きる、「食わず芋」とも日本で呼ばれている野生の里芋、ヤム芋の系統の山芋なども、前記の文物とともに完新世初頭に東シナ海を横断して、西九州と韓半島南部の地に渡來した可能性が強いが、これらの芋類は遺蹟に残存するものが殆んどないために、古代に傳來した證據を把握することは極めて難しいものである。

4. 稻の傳播

今日韓國、日本で主食物になっている米、稻の傳播も西曆紀元前に遡ることは誰しも疑わないところである。

中國では長江中流域の湖北省、湖南省で今から9000年前のジャポニカ種の炭化※が発見されているが、これは野生稻の籾か栽培種かは明確でない。

今から約7000年前の浙江省河姆渡遺蹟では、畦畔の杭列も發掘され、水牛の肩胛製の鋤が多數發掘されており、水田で稻を栽培されていたことが證明された。河姆渡の炭火籾にはジャポニカ型の丸味を持つ稻籾と細長い型の稻籾があり、發見當初は前者がジャポニカで、後者はインディカと考えられたが、古代稻籾の研究者として著名な佐藤敏也氏が現地を訪れ、一部の標品を日本に持ち帰り計測研究など行った結果細長い形態のものもジャポニカ種の變種としての許容範囲内のものであるとの見解を發表された。

ジャポニカの自生地は雲南高原の低濕地との説もあったが、どうも長江中流域の湖南、湖北省方面の湖沼地帯の水邊地域と考えられ、この付近でジャポニカの野生稻が完新世初頭に湖沼周邊の低濕地で初歩の栽培へと進展をみたのでなかろうか。

そして長江下流域へと擴り、太湖周邊から錢塘江流域、河姆渡遺蹟方向へと擴ったものと推察される。

今から約5000年前の稻作遺蹟は太湖南部の錢山漾遺蹟、上海市崧澤遺蹟などが著名である。

浙江犬を始めとして先述した文物とともに稻もかなり早い時期、完新世初頭に、他の種子とともに海を渡って韓半島西南海岸や西九州地方にも渡來したものと思われるが、高度の栽培技術を必要とする、稻の栽培には何度から失敗が繰り返され韓半島では中國東北地方から渡來の大麥、小麥、粟、黍などの栽培が定着し始める、5000年～4000年代に入ってようやくその栽培の緒についたとみるべきであろうか。

3000年代以降、南漢江流域の欣岩里遺蹟、扶余松菊里遺蹟の時代に入ると、稻栽

培もようやく定着したと思われる。

西九州地方でもその栽培の萌芽は縄文時代後期末、今から3000年前にまで遡れるが、西北九州地方で水田が作られ、稲作がようやく定着するのは松菊里遺蹟より若干遅れBC4世紀中葉頃かと思われる。

濟州島でも僅かな低濕地を利用の稲作の起源は前記した時期にまで遡れると思われるが、まだそのような遺物の発見はないようである。

5. 支石墓

濟州島にも碁盤形支石墓は島内各地で発見されているが、支石墓直下または周邊部の地下に所在の土壙墓、石棺墓を發掘調査された例はなく、これらの支石墓の築造年代は明らかでない。韓半島から中國東北地方にわたって廣く分布する支石墓は韓半島中部ソウル市付近にまで分布する卓子形支石墓が碁盤形支石墓より古形式のものとの見解が従来定説化していたが、近年調査の進展とともに碁盤形支石墓や上部は大きな平石のみで支石を全く欠く、無支石墓とも假稱される形式のものもあり、これらも卓子形支石墓の分布する韓半島北部から中國東北地方にも分布し、近年全南麗川市積良洞で發掘調査した碁盤形支石墓の石棺内からは數多くの遼寧式琵琶形青銅劍などの副葬品を伴うもので、その築造年代はBC5世紀より古い時期のものと考えられた。

支石墓の編年的研究と中國遼寧省方面にその起源があるとする推定はここで今一度考えなおす必要にせまられているようである。

濟州島の西南海上にある加波島にも10基に近い支石墓がある。支石墓は海洋漁撈民の墳墓とも考えられる。

近年に至って注目すべき大発見が中國浙江省の東南部にあり、支石墓の源流をこの地方に眼を向ける必要性が生じてきた。

1958年5月發刊の「浙江新石器時代文物圖録」浙江省文物管理委員會編の末尾の附録6として「瑞安岱石山石棚建築遺蹟」として典型的な碁盤形支石墓の寫眞が掲載されたのが、この地方に支石墓の存在を公表した最初のものである。變形B4判の大冊にモノクロ、キャビネ版の寫眞が1枚掲載されているだけで、浙江省東南部の瑞安縣岱石山上に一基のみの支石墓が存在するのか、群在するものの一つを紹介したのか、この文物圖録のみでは全く詳細を知るすべがなかった。

私がかねてからこの方面の遺蹟に注目、1944年頃瑞安に近い温州地區の印紋硬陶の遺蹟を踏査したこともあり、實査機會をつかみたいと考えていた。

1988年8月北京市で開催の學會に出席の後、社會科學院考古學研究所の王仲殊先生などの御紹介をいただき浙江省杭州市、福建省福州市、浙江省温州市などの古代遺蹟探訪の機會を得、杭州市では王仲殊先生と同窓の杭州博物館長、杭州大學教授の毛昭晰教授に面接し、温州市南郊瑞安市の支石墓についての概略を伺うことができた。

1991～92年毛昭晰先生の御盡力で未開放地區に所在の支石墓群の實査を実現することができた。

以下に紹介する支石墓は浙江省杭州大學で毛先生の講義に出席した温州市文物管理處の徐定水氏、瑞安市の前文物館長俞天舒氏などの調査によって発見されたものである。

瑞安市街の東方岱石山に所在した支石墓もかつては數基所在したようであるが、村人によって破壊され、その殆んどが建築資材などに使われ、前記圖録に掲載のものもその一部が残存するのみで當時の全景は全くわからない状況になっている。

また瑞安市の西南、馬嶼區篁社郷石垌村棋盤山上には一つの尾根に2基、相隣接する尾根に4基の碁盤形支石墓が残存していた。（寫眞）

案内された俞天舒氏の踏査記録の寫眞アルバムを見ると、この付近の丘陵地帯にはまだ數多くの碁盤形支石墓が存在するようである。

未だ發掘調査の行れたものはなく、支石墓周邊・地下にどのような遺構があり、何時頃に築造されたものかなど、副葬遺物についてもまだ皆目不明である。

毛昭晰先生の想定では今から約3000年前、良渚文化の時代のものではないかとされている。

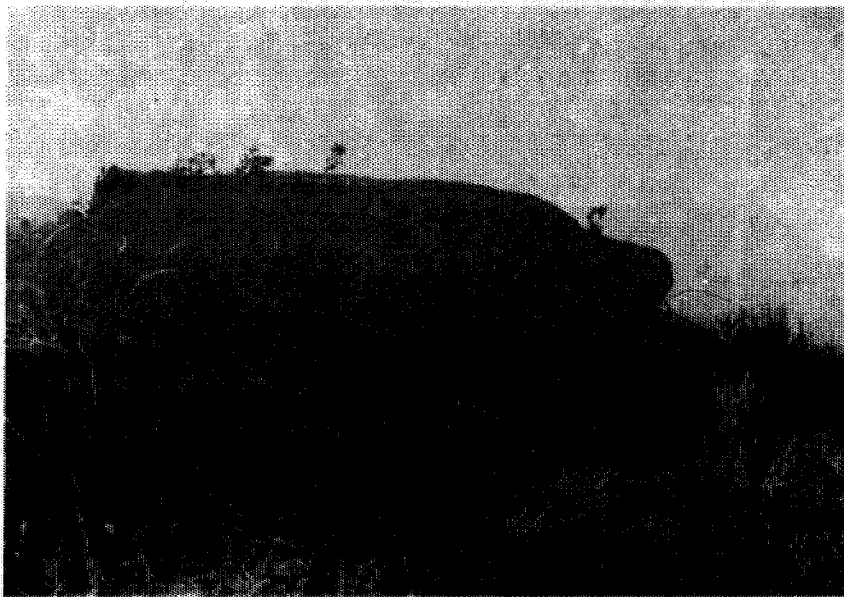
韓半島西南部の碁盤形支石墓と近似の支石墓群が浙江省南部に所在し浙江省方面の築造年代が若干古いことが明らかになり、副葬品などにも關連ある遺物が出土することになれば支石墓の源流も中國の江南地方ということになり、珍島犬、荏胡麻など前記した文物と同一ルーツをたどることになり興味深い今後の研究課題である。

環東シナ海をめぐる古代文化研究上 濟州島の諸遺跡探索の問題点と展望

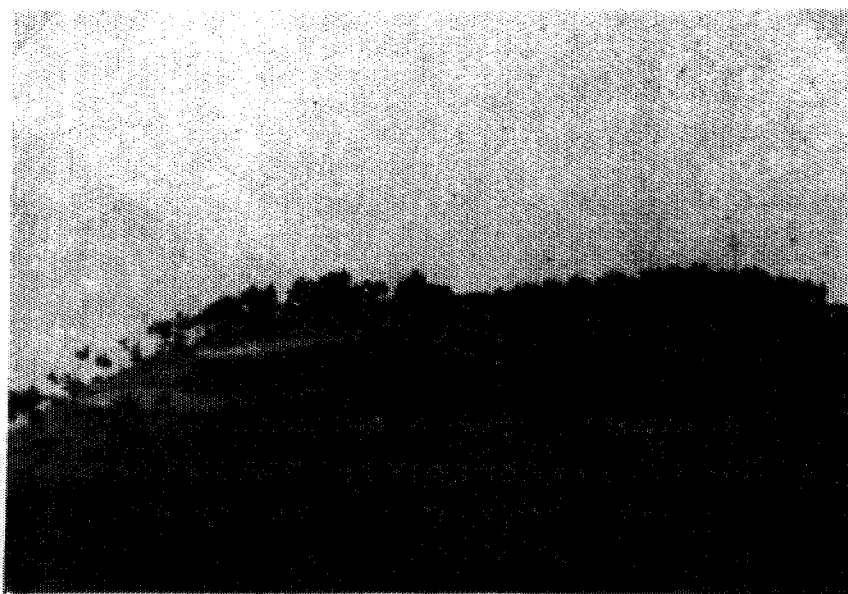
以上に発表した種類の文物の韓半島への最初の波及場所として濟州島は重要な位置に所在しており、今後の綿密な探索によっては、續續と貴重な資料の発見のある場所と思うのである。

舊石器時代、更新世には韓半島を南下し東北アジア地区から濟州島にまで達した獸類の存在は、ある時代全南地方と陸續だった時代も想定され、また植物相が韓半島より九州地方に類似している点は九州と陸續きの時代もあったと考えられ、舊石器時代には東シナ海の大陸棚が陸化していたことも考え今後種種の問題点が発生するように思われる。

また完新世に入っては前述したように海洋民の渡海文化交流を十分考慮すべきであろうか。

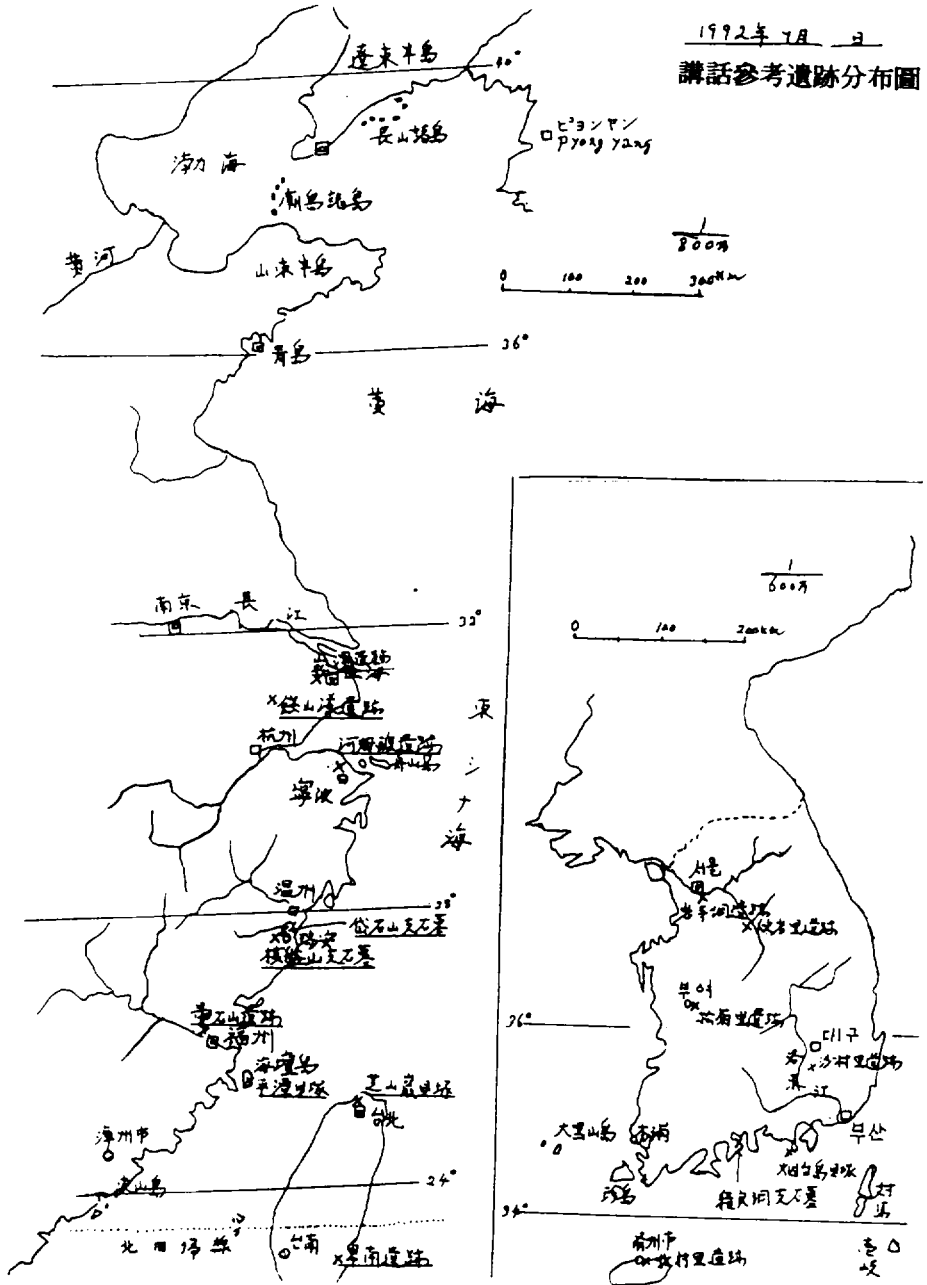


瑞安市 馬嶼區 棋盤山の 支石墓



棋盤山支石墓 造景

環東シナ海をめぐる古代文化研究上 濟州島の諸遺跡探索の問題點と展望



環東지나해를 둘러싼 古代文化 研究上 濟州島 諸遺跡探索의 問題點과 展望

江坂 輝彌(Esaka Teruyo)

강 태 국 역 *

I. 序 論

南北 100km, 東西 800km인 東지나해는 台灣의 對岸, 中國 福建省 泉州市 부근 해안에서 작은 배에 편승, 東北 혹은 東北東 方向 1,400~1,500km 서쪽을 향해 航海하면, 九洲地方 서부나 한국 서남부에 도달한다. 本 濟州島도 이 行程 거의 중앙에 위치한다.

요즘 이 泉州 부근 등에서 10톤 정도의 어선에 수십명씩 타고, 약 일주일 정도 일정으로 한국 남부나 일본으로 밀항해 오는 사람들이 많은 것을 신문보도 등으로 익히 알고 있을 것이라고 생각한다. 이 코스는 바람과 조류를 잘 타면 비교적 쉽게 渡海할 수 있다. 중국 廣東省, 福建省 해안 지방에는 어업을 傳業으로 하는 蜑民(Tanmin)이 거주하고, 작은 배에서 사는 사람도 많은 海洋民이다.

이 사람들이 古代로부터 남지나해, 동지나해를 자기들만의 영역으로 여기면서 航海해 왔던 것이다. 이 항해의 시작은 繩文海進이 개시되었던 完新世(沖積世)초두 約8,000년 전까지 거슬러 올라갈 수 있다고 생각한다.

또한 更新世(洪積世) 최후인 뷔름(Würm) 氷期시대에는 東지나해 대륙붕 지역과 黃海는 陸地化되어, 한반도와 제주도, 西北九州 일부 등이 육지로 이어진 곳도 있었다고 생각된다.

* 제주대 일어일문학과 교수

그 후 後氷期시대에 들어와서, 지구가 온난화됨에 따라 氷河지역은 極地와 高山地帶로 후퇴하고, 대륙 山地를 源泉으로 한 河川 水量도 증대하여 태평양 등 海水面도 점차 상승 氷期 정점에는 해수면이 150m정도로 低下되었던 것이, 繩文海進 정점 즉 지금부터 약 6,000년전에는 現沖積평야 표고 약 2m정까지 해면에 수몰되어, 평야지대는 넓은 간석지로 되었고, 간석지를 좋아해서 서식하는 魚貝類가 豊産되는 시대를 맞이하게 된다.

근래 福建省 남부 彰州市(Chan Shu) 부근에서도 다수의 후석기 시대 유적이 발견되었다. 이 무렵, 대만해협 수심 20m내외의 淺海는 陸地化되어, 台南市 방면과는 육지로 이어져서, 彰州市 부근 原産 岩石으로 제작된 소형 剝片 石器가 台南市 부근 후석기 시대 유적에서도 발견되어 화제를 불러 일으키고 있다.

또 근래 벼 재배는 중국 長江 유역인 湖南, 湖北省 方面에서는 지금으로부터 약 9000년 전 자포니카가 야생벼에서 재배벼로 한발 내디딘 것 같은 形跡이 있고, 長江 下流地域으로부터 浙江省 杭州灣 일대까지는 지금으로부터 약 6000년 전 水畚경작이 시작되어 물소의 肩胛骨을 약간 加工하여 팽이를 만들어 이것으로 경작을 했던 모양이다.

이 시대의 대표적인 유적은 浙江省 寧波市 근방 余姚市에 所在하는 河姆渡(HeMuDu) 유적이 있고, 유적 옆에 이번 가을, 이곳 出土品을 중심으로 한 河姆渡 博物館 개관이 예정되어 있다.

河姆渡 유적지에서는 玦狀耳飾, 목걸이, 구슬 등 장신구류, 벼 이외에 콩류 등 재배식물도 다량 발굴되고 있다.

지금으로부터 약 8000~6000년전 이후 경에, 浙江省 杭州灣 연안 부근 일대로부터 東지나해를 횡단해서, 한반도 서남부, 제주도, 西九州지방에 渡來한 文物은 매우 많다고 생각한다.

나는 오늘, 考古學의인 시점에 서서 이 지역의 文物交流를 유적·유물의 實例를 들어가며 이야기해 나가려고 한다.

II. 本 論

1. 浙江犬, 珍島犬, 柴犬의 뿌리

오늘날 제주도에도 서식하고, 전라남도 서남부 珍島에서 天然記念物로 지정 보호하고 있는 진도견의 존재는 잘 알고 있으리라 생각한다.

이 진도견은 양 귀를 세우고, 꼬리를 위로 감는다. 털은 短票毛 짧은 밤색 털)인 中型犬으로서, 일본 열도에서 생육하는 중형 日本犬 柴犬Shi Bainu와 비슷한 體型을 한 개이다.

體型과 털빛이 이와 비슷한 개는 중국 浙江省 남부 山地로부터 福建省 북부 山地에 서식하고, 浙江犬이라고 부르고 있다. 또 浙江犬과 비슷한 중형개는 대만, 동남아시아인 월남지방까지 오늘날 사육되고 있다.

이 개들은 浙江省 山地에서, 구석기 시대에 야생견이 가축화되어 우선 사슴, 멧돼지 등 수렵시 山林에서 초지로 몰아내는 勢子의(바둑돌)역할을 하도록 훈련시킨 것으로 생각된다. 河姆渡 유적에서도 가축화된 이 중형견의 아래 턱뼈, 두개골이 많이 발굴되고 있고, 두개골은 완전하고, 매장되었던 개도 있었을 가능성을 생각해볼 수 있다. 또 수렵의 대상이 되었던 사슴이나 멧돼지 뼈격도 많이 발굴되고 있다.

台北市 士林區 芝山巖 貝塚는 出土된 조개껍질, 숯으로 의한 카본14의 연대 측정으로 지금으로부터 약 3800년 전 것으로 삼고 있다. 이 貝塚에서도 중형견의 두개골, 아래턱뼈, 四肢骨등이 다량 발견되었고, 사슴, 멧돼지류의 뼈도 많아 이 시대에 수렵견으로서 浙江犬을 데리고 와서 사육하고 死亡한 것은 매장해 주었던 것이 아닌가고 推察된다.

다분히 浙江犬이 한반도 서남부와 일본열도에는 繩文文化早期 中葉인 지금으로부터 약 8000년 전에 渡來했던 것으로 생각된다.

일본에서는 四國의 受媛縣, 上浮穴郡 美川村 上黑岩 岩陰유적(Rock-shelter)第4文化層, 長野縣 南佑久郡 北相木村 枋窪 岩陰유적에서 押型文 土器에 따른 두 마리와 또 한마리 중형견이 매장되어서 그 完全한 뼈대가 발굴되었다.

따라서 일본 승문문화 초기중엽에는 시바이누(柴犬)와 동형인 개가 수렵견으로 사육했던 것이 틀림없고, 浙江犬이 일본열도에 渡來된 시기는 이보다 더 거슬러 올라가는 것은 의심할 여지가 없다. 또 일본에는 浙江省 方面에서 발생한 것으로 생각되는 玦狀귀걸이도, 거의 이 시대까지 거슬러 올라가, 浙江犬과 함께 渡來한 장신구인것으로 생각된다.

浙江犬과 동형인 중형견이 한반도 서남부에 도래한 것도 거의 일본열도와 동시기라고 생각되지만, 한반도 남부에서 이 시대에 해당하는 유적은 아직 발견되지 않은 모양이고, 오늘날 알려진 것은 이때보다 수천년 늦은 지금으로부터 약 5000년전 橿文(빗살무늬) 土器文化時代의 貝塚에서 발견된 中型犬이나, 오늘날 알려진 最古의 것일런지(경상남도 통영면 산양면 연대섬 패총 등)

橿文土器文化 시대의 패총에서는 매장한 것으로 보이는 犬骨 발견은 알려지고 있지 않지만, 一世紀 초엽 경의 無文土器가 出土된 初期 鐵器시대의 패총, 즉 전라남도 서남부의 해안군 송지면 군곡리 패총에서, 木浦大學 발굴 Trench에서 이 中型犬의 매장골격으로 생각되는 견골이 발굴되고 있다.

또 인접한 국립 광주 박물관 발굴 Trench에서는 이것과 다른 대형견의 매장골격이 출토된 모양이나, 미발표 자료이고, 상세한 사항은 동박물관의 발표를 기다려 본다. 더욱이 경상남도 김해시 부원동 패총에서 발굴된 대형견 골격은 下顎骨이 金海市廳 건축공사로 파괴된채, 東亞大學博物館에 보존되어 있다. 이것도 군곡리 패총과 거의 동시대의 것이다.

일본열도에 있어서도 동북지방 宮城縣, 阿武隈川 유역 柴田郡 柴田町 上川名에 있는 繩文文化 前期 초두, 지금으로부터 약 6000년전의 패총에서 중형견 柴犬의 先祖와는 다른 대형견의 두개골, 下顎骨 四肢骨 일부등이 1947년경 그 고장 국민학생에 의해서 발견되었으나 이것도 뼈가 한마리 것으로 생각되고, 패총의 패층속에 매장되어 있었던 대형견의 골격 일부가 아니었다고 推察된다.

일본에서는 대형견의 골격, 치아 등 일부는 橫濱市 杉田패총(繩文時代후기) 등 여러 유적에서 발견되고 있으며 이들 대형견은 중형견과 달라 동북아시아 방면에서 도래한 다른 系統의 개가 아닌가 생각하고 있다.

다분히 일본에는 繩文文化 초기, 지금으로부터 약 8000년 이상 전에 도래한 것이 아닌가고 생각된다.

한반도에 있어서의 대형견은 아직은 발견된 예는 적으며, 橿文土器文化 시대에 대형견이 가축으로서 사육했는지 어떤지 전혀 밝혀지고 있지 않지만, 동북아시아 방면으로 초기 橿文土器 文化가 한반도를 남하한 시대, 完新世 초두에 동북아시아로부터 도래해 온 것이 아닐까.

麻布 獸醫科大學 田名部雄一 교수는 혈청학의 입장에서, 浙江犬과 일본 柴

犬시바누스)세에 커다란 차이가 있고, 그 중간적 양상을 갖는 것이 珍島犬이며, 浙江犬과는 다른 양상의 혼혈변화를 생각하고 있다.

나는 이것은 한반도에 있어서 북방 대형견과의 혼혈과 일본열도에 건너와서 北海道로부터 동북일본에 도래한 북방대형견과의 혼혈에 의한 것이 아닌가고 생각하고 있지만 이 견해가 올바른 것인지 어떤지 전문가인 田名部교수의 의견을 아직 듣지 못했다.

珍島犬과 동형인 개는 오늘날 아직도 제주도에도 사육하고 있으며, 郭支 패총이나 사계리 패총 등 無文土器시대로부터 한림읍 한돌동굴, 조천읍 북촌리 유적(패총) 등 櫛文土器文化 후기시대까지 수렵용 기로 사육되었던 발자취를 더듬어 볼 수 있다(李清圭교수 발굴 자료).

그러나 제주도에서는 오늘날 이것보다 앞선 櫛文土器文化 유적은 발견되고 있지 않다. 다분 櫛文土器 전반기 유적은 完新世 초두, 제주도는 화산활동 기여서 熔岩台地의 용암밑에 등 화산분출물 밑에 매몰되어 있는 것으로 생각된다.

따라서 이후 도내에서 신설도로, 즉 산언덕 등을 깎아내서 만들 때 언덕밑 등 화산 퇴적물 하층이 보이는 곳을 주의깊게 관찰해가면 櫛文土器文化 前半기의 유적을 발견할 수 있는 가능성이 강하다고 생각된다.

2. 玦狀耳飾의 퍼짐

일찍이 玦狀耳飾(귀걸이)는 동남아시아에서 기원을 발하고 승문문화 전기경 일본에 도달한 것이라는 가설이 주장되었다. 그러나 근래 중국 長江南部 지역 고고학 조사가 진전함에 따라 上海市 崧澤(Songze) 유적이나 南京市 北陰陽營 유적등에서 지금으로부터 약 5000년전으로 거슬러 올라가는 玦狀耳飾(결상귀걸이)이 다수 발굴되고 1973년 여름, 浙江省 余姚縣 阿姆渡 유적이 발견되어 약 7000~6000년전 문화층에서 수 많은 결상귀걸이가 출토되었다.

阿姆渡(HEMUDU) 유적 출토의 결상귀걸이는 形體는 環狀이고, 살이 두툼한 것으로 일본·승문문화 조사 말부터 전기의 전엽까지 유적 출토한 것과 비슷한 형태를 하고 있다. 다분히 일본 열도 西九州지방으로 동지나해를 건너서 처음으로 도래한 것은 중국 강남지방에서도 신석기 시대 초엽 阿姆渡 유적의 사람들이 사용했던 古型式 결상귀걸이이고, 이 형태의 것도 일본열도에서는

동북지방 남부 宮城縣에까지 도달하고 있다(宮城縣 柴田町 上川名 赤松 上例 등).

그래서 환상의 결상귀걸이에 있어서 肉薄扁平하고, 上반이 약간 길게 퍼진 형태의 것은 중국에서도 崧澤 北陰陽營 등 지금으로부터 약 5000년전 경 유적에서의 出土例가 많고 일본에서도 繩文시대 전기후반이 되면 이러한 형태의 것으로 변화하고 있다.

중국에서는 長江이북에도 약간 出土例가 알려지고 있으나 극히 적다. 동지나해를 浙江과 同一한 뿌리로 渡海傳播한 것이라면 결상귀걸이는 한반도 서남부 제주도등에서도 發見例가 있어야 할 것이다.

일본에서도 九州 서남부 지역에서는 거의 발견한 예가 알려지지 않았었지만, 근래 鹿兒島縣 薩摩半島 서남단 枕崎市 서남서 100km 동지나해상에 떠있는 작은 섬 草垣諸島 북단 동대가 있는 섬에 Heliport건설 중, 섬 平坦面에서 繩文문화 전기 초두의 石坂式 土器 조각과 함께 1점이지만 결상귀걸이 파편이 발견되었다.

나는 가까운 장래 한국 남부에서도 꼭 결상귀걸이가 발견될 것이라고 은근히 기대하고 있었다.

이 기대에 어김없이 국립중앙박물관 李建茂씨가 경상북도 청도군 사촌리 유적에서 表採해온 무문토기 조각에 섞이어 乳白色 滑石質인 岩石으로 제작된 결상귀걸이 조각으로 생각되는 유물의 존재를 깨닫고, 필자에게 그 감정을 부탁해 왔었는데, 이것은 분명히 결상귀걸이었다.

나는 초기 철기시대나 그 직전의 무문토기 시대의 것이 아닌가고 생각하여 表採의 모든 파편을 하나하나 손에 들고 상세하게 관찰해 본 결과 크기 1cm 정도의 작은 파편이긴 하나, 爪形 刺突文이 施文된 櫛文土器인 작은 파편을 발견했다.

나는 다분 이 櫛文토기조각은 伴存한 한국 신석기 시대 전엽의 것으로 생각한다. 이 한 조각의 발견이지만 한국에도 浙江과 함께 약 7800년 전에 결상귀걸이가 도래해 있었을 가능성이 농후해진 것으로 보는 것이 타당할 것이다.

결상귀걸이는 제주도 고대유적에서도 발견 가능성이 있을 것으로 생각한다.

3. 荏胡麻(들깨), 漆梶(꾸지나무), 剽簞(바가지), 녹두 등 유용 도 래식물에 대해

한국에서 들깨라고 부르고, 얇은 갈비나 회를 싸 먹거나 김치를 해서 먹고, 종자는 과자로 만들거나 갈아서 으깨어 죽으로 혹은 뜨거운 물에 그 가루를 풀어서 사탕이나 벌꿀 등을 넣어 들깨차로 먹곤해서 용도는 광범위하다. 또 종자는 기름을 짜서 식용, 등불용, 공업용 등 다양하게 쓰여진다.

이것이 傳播 한반도 남부에서는 完新世 초두, 즐문토기문화 초두, 지금으로부터 약 8000년 전 경까지 거슬러 올라가는 것으로 생각되지만 한국내 여러 유적에서는 들깨 종자 발견은 전혀 미확인이고, 이후의 조사에 기대를 걸어본다.

들깨는 인도 동북부, 미얀부 북부 山地에서 雲南, 廣西, 貴州山地, 湖南, 廣東, 江西, 福建, 浙江省 등 중국 남북산지에서 넓게 자생하는 紫蘇科 식물로서 이 지방에 자생하는 옷 수액을 목제품등에 칠할 때, 옷칠이 塗布面에 잘 퍼지게 하는 完化제로서 들깨기름이 사용되고 있다.

중국에서는 지금으로부터 약 7000년 전에 목재, 사발, 접시, 바구니 등에 옷칠한 것이 河姆渡 유적 등에서 발굴되었고, 일본에서도 福井縣 三方郡 三方 玳 鳥濱 패총 등에서 즉 승문시대 전기 초두, 지금으로부터 약 6000년 전 유적에서 붉은 옷칠한 빗, 목재 그릇 등이 발굴되고 있으며 浙江犬과 같이 浙江省에서 동지나해를 건너서 일본열도 西方州방면과 한반도 서남부에 옷과 들깨 종자가 도래하고, 樹脂塗科를 칠하는 기술도 전달됐던 것이 아닌가 생각된다. 또 한국에서 물을 푸고 술을 마시는 주격으로 애용하는 바가지(剽簞) 전래의 역사도 꽤 오랜 옛날로 거슬러 올라가리라 생각되지만, 한국에서는 이것도 역시 고대 유적에서 발견된 예는 거의 알려지고 있지 않다.

剽簞(표주박)은 원산지가 서남아프리카의 니젤천 유역 지방이지만 동북아프리카, 아라비아, 인도를 거쳐 동남아시아 지방까지 전반한 것은 完新世 초두 약 8000년 전이라고 말하며 지금으로부터 약 7000년전의 浙江省 河姆渡 유적에서도 표주박 果皮와 종자가 出山되고 있다.

또 일본열도에서도 西九州지방, 熊本縣, 宇土市 曾畑 패총 근방 저습지 유적에서 승문시대 전기초두 轟(Todoroki) A式시기의 저장 穴內에서 지금으로부터

터 약 6000년 전의 표주박이 거의 完形인 果皮가 발견되고 있다. 이 밖에 福井縣 鳥濱 패총 등 여러 유적에서 출토되는 예가 보고되고 있다.

또 한국·농촌에서 요 근래까지 사용했던 바가지 형태도 완전 동형인 표주박을 세로로 쪼갠 주걱이 일본열도 남단, 오키나와縣 宮古섬, 石垣섬 방면에서 PeRa라는 명칭으로 사용되고 있는 점도 흥미깊은 일이다.

녹두도 버마 북부의 원산으로 오늘날 한국에서 사용하는 콩나물 원료로 되는 콩, 빈대떡을 하는 콩은 녹두이다. 무문토기 문화 유적에서 출토된 것으로 보고하고 있는 콩이란 것을 상세하게 조사해 보면, 녹두로 판별되는 것이 있을까 생각하고 있지만, 오늘날 아직 판별된 것은 없다. 이보다 거슬러 올라가서 즐문토기문화 시대의 것에 대해서는 아직 전혀 알려지지 않고 있다.

중국에서는 河姆渡 유적등에서 출토된 예가 알려져 일본에서 福井縣 鳥濱 패총, 鳥取縣 桂見 유적등에서 出土例가 보고되고 있다.

楳(꾸지나무)도 동남아시아 지방을 원산지로 하는 식물로서 일본에서는 山桑(Yamaguwa)라고도 부르고 있는 뽕나무와 같이 양잠 사료로 사용되고 있으나, 봄으로부터 여름에 걸쳐 자라나는 새잎 껍질을 벗기어 물에 담겨서 이 식물 섬유를 한덩어리로 해서 棒같은 것으로 두들겨 늘여 paper모양의 섬유천을 만든다. 이것은 오늘날에도 폴리네시아의 피지섬등에서 「TaBa」라는 명칭으로 사용하고 있다. 이 섬유의류는 중국에도 전파되어 꾸지나무씨는 河姆渡 유적에서는 발견되었고, 이 의류는 古書에서는 「TaBa」라는 명칭으로 기재되어 있다.

일본에서는 하얀 Shiro Tahe, Nigi Tahe 등 Tahe의 명칭으로 万葉集에 보이지만 이것은 중국의 Taba에서 轉化된 명칭으로서 본래는 꾸지나무 섬유의료를 가리킨 명칭이었지만, 8세기경 이후 비단직물이 일반화됨과 동시에 비단 직물을 가리키는 명칭으로 변화한 것일 것이다.

꾸지나무 씨는 처음 승문문화 만기의 것으로 靑森縣 八幡崎 遺蹟에서 발견되어 약 3000년 전에 꾸지나무가 일본 북단 靑森縣에까지 퍼져서 식수되었던 것이 밝혀졌다.

꾸지나무는 福井縣 鳥濱패총에서도 종자가 발견되고 있으며, 승문시대 전기 초두에는 前記한 文物과 함께 일본열도에 넓게 침투해 있었던 것은 명확한 일이고, 이상 논술한 文物이 完新世초두, 동지나해를 건너 일본열도 西九州지

방에 전파됨과 동시에 한반도 서남부에도 전파되고 있었던 것은 거의 틀림없는 일이고, 이후 이 地區의 저습지 유적 발견 조사에 기대되는 일이 크다.

또 이 전파 정도로 미루어 보건대, 이것들 文物이 당연히 제주도에도 도래했었다는 것은 의심할 수 없고, 이후 유적발견·탐색에 의해서 생각치 않는 곳에서 발견하는 기회가 있을 것으로 사료된다.

또 제주도를 포함해서 한반도 남부에 현재 Taro토란, 동숙인 토란(里芋)을 재배하여 먹고 있지만, 현재는 거의 먹지 않는다. 뚝은 맛이 강하고 물에 담겼다가 전분을 뺄 수 있다. 「먹지않는 토란」이라고 일본에서 불리어지고 있는 야생토란, Yamuimo계통인 참마(山芋) 등도 前記 文物과 함께 完新世 초두에 동지나해를 횡단해서 西九州와 한반도 남부의 땅에 도래한 가능성이 강하나 이것들 토란 類는 유적에 남아 있는 것이 거의 없기 때문에 古代에 傳來된 증거를 파악하기는 매우 어려운 일이다.

4. 稻(벼)의 傳播

오늘날 한국 일본에서 주식물로 되어 있는 쌀, 벼의 전반도 西曆紀元前으로 거슬러 올라가는 것은 아무도 의심하지 않는 일이다.

중국에서는 長江 중유역 湖北省, 湖南省에서 지금으로부터 약 5000년전 자포니카 종인 炭火된 벼씨가 발견되어 있지만 이것은 야생벼의 벼씨인지 재배종인지는 명확치 않다.

지금으로부터 약 7000년전의 浙江省 阿姆渡 유적에서는 畦畔(밭이랑 논두렁)의 말뚝도 발굴되어 물소의 肩胛製인 팽이가 다수 발굴되고 있으며 水田으로 벼를 재배 했었던 것이 증명되었다.

阿姆渡의 炭火등거에는 자포니카형인 둥그스름한 벼씨와 가늘고 긴 형인 벼씨가 있어서 발견 당초는 전자가 자포니카이고, 후자는 인디카로 생각했었지만, 古代벼씨 연구가로서 저명한 佐藤敏也씨가 현지를 찾아 일부의 표품을 일본으로 갖고 와서 計測 연구 등을 한 결과 가늘고 긴 형태의 것도 자포니카 종의 변종으로서의 허용범위내의 것이라는 견해를 발표했다.

자포니카 자생지는 雲南高原의 低濕地하는 설도 있었지만 아무래도 長江 中流域인 湖南 湖北지대의 水邊지역으로 생각되며, 이 부근에서 자포니카 야생벼가 完新世 초두에 湖沼 주변인 저습지에서 초보적인 재배로 진전해 본 것이

아닌 것일까.

그래서 長江 하류역으로 퍼지고, 太湖주변에서 錢塘江유역 河姆渡유적 방향
으로 퍼져 나간 것으로 추찰된다.

지금으로부터 약 5000년전 稻作유적은 太湖남부인 錢山漾유적 上海市 崧澤
유적 등이 저명하다. 浙江을 비롯하여 先述한 文物을 바탕으로 하여 벼도
꽤 이른 시기, 完新世 초두에 다른 종자들과 함께 바다를 건너서 한반도 서남
해안이나 西九州 지방에 범씨도 도래한 것으로 생각되지만 고도의 재배기술을
필요로하는 벼 재배는 몇 번이나 실패를 거듭하면서 한반도에서는 중국 동북
지방에서 도래한 보리, 밀, 조, 옷 등 재배가 정착하기 시작한다.

5000~4000년대에 들어가서 겨우 그 재배의 단서를 잡게 되었다고 보아야
할 것이다. 3000년대 이후 남한강 유역은 은암리 유적, 부여 송국리 유적의
시대에 들어가면 벼재배도 드디어 정착한 것으로 생각된다.

西九州지방에서도 그 재배의 萌芽는 승문시대 후기말, 지금으로부터 3000
년전까지 거슬러 올라가지만, 西九州지방에서 水田이 만들어지고, 벼농사가
겨우 정착하는 것은 송국리 유적보다 약간 뒤떨어진 BC 4세기 중엽이라고 생
각된다.

제주도에서도 조그만 저습지를 이용한 벼농사의 기원은 前記한 시기까지 거
슬러 올라간다고 생각되지만, 아직은 그러한 유물의 발견은 없는 모양이다.

5. 支石墓

제주도에도 碁盤形支石墓는 도내 각지에서 발견되고 있지만, 지석묘 直下
혹은 주변부의 지하에서 소재하는 土墳墓, 石棺墓를 발굴 조사된 예는 없고,
이러한 지석묘의 축조연대는 확실하지 않다.

한반도로부터 중국 동북지방에 걸쳐 넓게 분포하는 지석묘, 즉 한반도 중부
서울시 부근에까지 분포하는 卓子形 지석묘가 碁盤形 지석묘보다 古形式인 것
으로 보는 견해가 종래 정설화되고 있었지만, 근래 조사의 진전과 함께 碁盤
形 지석묘나 上部는 크고 平石만으로서 지석은 전혀 없는 무지석묘라고 假稱
되는 형식인 것도 있고, 이런 것들도 탁자형 지석묘가 분포하는 한반도 북부
로부터 중국 동북지방까지 분포하고, 근래 전남 여천시 적양동에서는 발굴조
사한 바둑판형(기반)지석묘의 石棺속에서는 많은 遼寧式 비파형 청동검 등 부

장품을 수반하는 것으로서 그 축조연대는 BC 5세기보다 오랜 시기의 것으로 생각된다.

지석묘의 편년적 연구와 중국 遼寧省 방면에서의 기원이 있다라고 하는 추정을 여기서 한번 다시 생각해 볼 필요가 있는 것 같다.

제주도 서남해상에 있는 가파도에도 10基 가까운 지석묘가 있다. 지석묘는 해양 어로민의 분묘로도 생각할 수 있다.

근래에 와서 주목할 대발견이 중국 浙江省 동남부에 있어, 지석묘의 원류를 이 지방으로 눈을 돌리는 필요성이 생겨났다.

1958年 5月 발간인 「浙江省新石器時代文物圖錄」 浙江省文物管理委員會編의 末尾 부록6에서 「瑞安岱石山石棚建築遺蹟」의 제하로 전형적인 碁盤支石墓 사진을 게재한 것이 이 지방 지석묘 존재를 공표한 최초의 것이다.

변형 B4判인 큰 책에 흑백사진, 카비네版 사진이 한장 게재됐을 뿐이며, 浙江省 동남부 瑞安县 岱石山上에 一基뿐인 지석묘만 존재하는지 群在하는 것에서 하나만을 소개하고 있는지, 이 文物圖錄으로만은 전혀 자세히 알 길이 없었다.

나는 이전부터 이 방면 유적에 주목하고 1944년경 瑞安县에서 가까운 溫州市의 印紋硬陶유적을 답사한 일도 있고, 實査기회를 갖고 싶다고 생각하고 있었다.

1988년 8월 北京市에서 개최한 학회에 출석한 사회과학원 고고학 연구소의 王仲殊선생과 동창인 杭州박물관장, 杭州대학교 교수인 毛昭晰교수와 면접하고, 溫州市 南郊 瑞安市 지석묘에 대해서 概略을 들을 수 있었다.

1991~1992년 毛昭晰선생 힘으로 미개방지구에 소재하는 지석묘군을 실사함을 실현하게 되었다.

이하 소개하는 지석묘는 浙江省 杭州大學에서 毛선생 강의에 출석한 溫州市 文物 관리처의 徐定水씨, 瑞安市 文物館 前관장 俞天舒씨들이 조사해서 발견된 것들이다.

瑞安市街 동쪽 岱石山上에 소재하는 지석묘도 이전에는 數基 소재 했었던 것 같았는데 마을 사람들에 의해서 파괴되고 그 대부분이 건축자재 등으로 사용해서 전기 圖錄에 게재한 것도 그 일부가 잔존해 있을 뿐 당시의 전경은 전혀 알 수 없는 상황이었다(사진).

안내를 받고 徐天舒씨 답사기록 사진 앨범을 보면, 이 부근의 立陸지대에는 아직도 수많은 碁盤型 지석묘가 존재해 있는 것 같다.

아직도 발굴조사를 한 것은 없고, 지석묘 주변 지하에 어떠한 遺構가 있고, 언제 쯤에 축조된 것인가 등 副葬 유물에 대해서도 아직 전혀 不明이다.

毛昭晰선생의 限定으로는 지금으로부터 약 3000년 전 良渚文化시대의 것이 아닌가 생각하고 있다.

한반도 서남부 碁盤型지석묘와 近似한 지석묘군이 浙江省 남부에 소재하고, 浙江省방면 축조연대가 약간 오래된 것이 밝혀지고 부장품 등에도 관련있는 유물이 出土하게 되면 지석묘 源流도 중국 江南지방이라고 말할 수 있어, 진도전, 물개 등 前記한 文物과 동일한 뿌리를 더듬어 볼 수 있어서 흥미가 깊은 이후의 연구과제이기도 한다.

이상 발표한 여러가지 文物이 한반도에 최초로 파급한 장소로서 제주도는 중요한 위치에 놓여있고, 이후 면밀한 탐색에 의해서 잇따라 귀중한 자료가 발견될 수 있는 장소라고 생각한다.

구석기 시대, 更新世에는 한반도를 남하해서 동북아시아 지구로 부터 제주도까지 도달한 짐승류 존재는 어떤 시대 전남지방과 육지가 이어졌던 시대로 想定되며, 또 植物相이 한반도보다 九州지방과 유사해 있는 점은 九州와도 육지가 이어졌던 시대도 있었다고 생각되며, 구석기 시대에는 동지나해 대륙봉이 육지화 되어 있었던 것도 생각해서, 금후 여러가지 문제점이 발생하리라고 생각된다.

또 完新世에 들어와서는 前述한 것과 같이 해양민의 渡海文化交流를 심분 고려해보아야 할 것이다.